

闇に潜む影

クリュネル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

暗い過去を持つ少年と人を信じれなくなったポケモンの少女が出会い、

光を創る・・・

少年は何を想い何を守れるのか、

少女は何を変えて何が変わるのか。

一人ぼつちの二人が出会い・・・

やがて運命に抗い始める。

あまり文才はありませんが頑張つて書いていきます。

温かく見守ってください。

あと、メンタル結構弱いデス・・・

p. s タイトル変えました「闇の影」↓「闇に潜む影」

目次

運命の廻り合い

過去と孤独

哀れな少年

罪の重さ

絶望の先

運命の回り道

最弱の旅立ち

狩る者、守る者

熱き焰の原子

炎熱と宵闇

小さき身体、大きな勇氣

闘いの証 強さの証明

76

66

56

47

34

28

22

16

9

1

月下の誓約

温もりが消えないように

支え合うこと

86

90

95

運命の廻り合い

過去と孤独

ハクダンの森

深夜

暗い森の中を動く小さな影が一つある。

よく見てみると人影である

しかもそれはまだ幼さが残っている、

十歳前後の子共のように見える。

その影はフラフラしていて今にも

倒れそうになっている。

周りに他の人はなく一人である

この森には人を襲うポケモンが居る。

少年がまだ無事なのはただの幸運と言えるだろう

それほど危険なのだ。

森に入るのであればポケモンを持って

ポケモンが出てきたらバトルをするのが普通なのだ。

しかし少年は、何も持たずに奥へ奥へと進むまるで死に急いでいるようだった。

僕は大きな過ちを犯した。

それは償いきれないほど大きく、

僕の心に暗く深い闇を

抱えさせた。

もう何も見たくない何も聞きたくない。

心が恐怖にとらわれている

苦しくて苦しくて涙がとめどなく流れ出る。

生きている価値なんてない、

蔑みの目しか向けられない

汚物のように扱われている。

自分さえいなければとさえ思う。

だから死のうと思つてここまで来た

誰にも見つからず静かに忘れてもらえるこの場所で。

ふと空を見上げる

木々の葉が生い茂っていて、

その葉の間からわずかな星明りが瞬いている。

視線を戻し小さくため息をつくとまた進む。

少し進むと視界の端に淡い青い光が見える、
すると無意識にそちらへ近づいて行く。

樹の影から様子をうかがうと、

1人の少女が月の光を浴びていた。

その姿は幻想的で美しく

まるで女神だった。

「綺麗だ・・・。」

そんな眩きが僕の口から漏れた。
そして一步近づこうとしたとき、
木の枝を踏み折ってしまった。

「っ、誰っ？」

逃げる間もなく押し倒されてしまった。
もがいても力が少女の方が強く、
逃げられない。

「君は誰だ？」

と聞かれその少女の方を向くと、
その少女は人間ではなかった。

頭には黒い耳に青の輪の模様がついている。
同じような尻尾もついている。

「ぼ……ポケモン……なのか……」

「まず、私の質問に答えなよ。」

「ぼ……僕は、セツナだよ。」

「ふうん、セツナ、セツナねえ……」

何かを考えているようだ。

襲おうなんて考えていたら好都合だと思い、

「殺すんなら殺せ、早く」

と言うと何を思ったか、

僕の耳に顔を近づけ

「人でありポケモンであるしかしどちらでもない」

と僕にささやきかけてきた

「私には君を殺せない」

そう言い僕の上から除けた。

「・・・？　なんで？」

「分からない」

不意にその時何が風を切って進む音が聞こえた。
それはこちらに向かってくる

「危ないっ」

「ふえっ!？」

無我夢中で少女を持ち上げて木に飛び乗った。

さつきまで居たところにラスターカノンが撃ち込まれた。

「あぶなっ、何なんだよ……」

「何なのはこっちの台詞だよ……」

「は?、何が?」

「なんで私を助けてこんな状況になってるかって話だよっ」

少し顔を赤らめて文句を言ってきた。

何のことだと数瞬考えるも分からず、

「こんな状況って?」

「なんで私をお姫様抱っこしてるのって話っ」

「えっ？　　うわあああああ！、いつの間に!？」

「セツナが飛ぶ寸前よッ、ってというか、気付いてなかったのかい？」

「避けるのに必死で・・・」

「ていうか今の何？明らかに狙ってたよね？」

「ああ、っ、静かにつ」

セツナ s i e d o u t

哀れな少年

セツナ s i e d

何か近づいてくる気配がする。

静かにゆっくりこちらに向かっている

反射的に恐怖を覚える。

僕は小声で少女に、

「見つかる前にさっさと逃げるぞそうしないと捕まっちゃうぞ」

とわざとおどけたように軽口で言う。

少女は反応を返さず近づいてくるものを睨んでいる。

(いきなり黙りこくってどうしたんだ?)

彼女の瞳は、僕と会ったときは硝子ののような瞳の奥に
少しだけ安心したような小さな光が一瞬
揺れていた。

しかし今は近づいて来る人影を
ただただ氷のような冷たい目をしていた。

よく見るとその人は

僕にも見覚えのある顔だった。

しかし今はあまり思い出せない

そんなことは頭の隅に追いやって、

「ねえ、何やってんの？ 行こう？ 逃げようよ。」

「君には関係ない。私はあいつを消す」

「何があつたか知らないけれど攻撃されちゃうよ

ポケモン居るんだよ死んじゃうよ……？」

「君死ぬんじやなかったの？」

それより君が何を言おうと

逃げない戦う。

それで死ぬなら其処までだから」

僕は冷めたような少女の声色に驚き
少し怯んだ。

確かに僕らは赤の他人だ。

何と言おうが関係ない、

ぼくは彼女を止める権利も無い。
でも

「僕は知り合った人には死んでほしくない

君が死んだら僕も死ぬ。」

紛れもない本心だ。

その為に僕は少女の僕より少し大きい手を優しく握りしめた。

少女は少しだけ体を強張らせた。

そこで僕は小さく微笑む、

すると少女は、

「仕方ない　かな、

分かったよ……。」

そう言つて体の力を抜いた。

セツナ　　s i e d　　o u t

???　　s i e d

私は人間というものが嫌いだ。

嘘ばかりで醜く反吐が出る。

それなのにグループを作って

人を平気で傷つける

私が見ていた人間は、

大概そうだった。

しかしさつき会ったばかりの少年は

何かが違った。

見てきた人とは瞳が違った曇りのない

まっすぐな眼

しかしそれ以外にも

黒くてモヤモヤしたもの、

それらを全て飲み込むような影

それは私と少し似たようなところが

あると思えた。

もう少しだけ

セツナと名乗る少年の事を知りたいと思った。

そんなことを考えていたら

いきなり手を優しく握って来た。

意味が分からない。

何で私みたいな奴の手を握ってくれるんだろう

そんな暖かい手を取る資格も何もない空っぽな奴なのに

しかしなぜかとても安心できたそんなこと

出来るはずなのに

仕方なく少年について行くことにした。

もしかしたら私に　　を与えてくれるかもしれない

そう思った。

森を走りながら、

「私はキノ、

ブラッキーだったポケモン。」

と自分のことを聞かせる

キノ s i e d o u t

罪の重さ

セツナ s i e d

あの晩襲われてからは

森の中を一心不乱に逃げまくり、

身を隠せそうな小屋を見つけ、其所で

森で出会ったキノと名乗る少女と過ごした。

一夜明け、キノより早く起きた。

キノの事についてはあまり判らなかつた。

其れについては僕も話していないからおあいこだろう。

しかし、知りたいという知的探求心が刺激され

キノの事を観察することにした。

間違はなく人間ではない

しかしヒトガタの他の生物は人間以外にいない

ヒトガタのポケモンなんて言語道断だ

しかしキノにはポケモンの耳と尾があるのだ。

気になったので、そつと触れてみる。

暖かかった。

少しだけ驚いたが、其れが

生き物の温かみなんだと感じた。

初めてだった。

生き物の温かみを感じたのは。

触っていると柔らかい毛並みが気持ちよく、
僕を安心させる。

「お母さんがいたらこの暖かさはもつと早く、深く、知れ・・・た・・・の?」
ふと身体から力が抜けて、暖かい眠りに墜ちていく。

セツナ s i e d o u t

キノ s i e d

不思議な少年セツナと森の中の小屋で
仕方なく一緒に居たとき、
寝る少し前に話をしていた時いきなり

「暖かいつて、心って何だろうね」

と言い答えずにいたら、

「其れを知りたい、感じて胸を張って生きたよって言いたい」

なんて言ってから無表情で悲しみを含んだ顔で

「おやすみなさい」

と言い寝てしまった。

私は理解出来ずに少しだけ驚いたが

そのまま睡魔に身を委ねた。

朝、目を覚ますとセツナが

頭や耳、尾を撫でながら悲しみを含んだ顔で

独り言を呟いていた。

その呟きからは、1人だった事を推測した。

しかし――

私は其れを考えている余裕がなかった。

「ふあっ！ひう・・・ひゃっ・・・うあ・・・あうう」

身体を甘い痺れが襲う。

今まで尾や耳を触られても嫌悪感しか抱かなかつた。

しかし今身体を支配しているのは、甘い疼きだった。

セツナを眠らせ、

原因を突き止めようと彼を観察した。

セツナはよくよく見れば、線が細く、

華奢なイメージを持った。

全体に目を通し、確認していくと

首の後ろに切り裂かれたような傷があった。

「何これ!?背中、傷だらけじゃないか!」

(もしかしてセツナも・・・でも同じ人なのに)

ふさがってはいるものの深い傷だらけで
痛々しいモノだった。

今までセツナはどんな人生を歩んできたのだろう。

自分も望まれないものだけど、セツナは
どうなのだろう。

傷やセツナの眩きからは

自分と同類のような気がするそう思えた。

だからこそ私は、

セツナという少年に惹かれていたのかもしれない。

絶望の先

セツナ sided

ふと目を覚ますとすつかり日が上っていた。

もうすでにキノは起きており此方を見つめている

(そうだ：僕は死ねなかつたんだ：早く死なないと

皆が生きていることを望まないのだから。)

「ゴメン、ここまで連れてきてしまったけれど僕はもう行かなきゃ。

ここからは前みたいに独りで：」

独りで生きて。

その言葉を紡ぐ前に言葉を遮られる。

「煩い。独りで何をするんだい？ どうせ独りで死に行くだけだろう。

私と関わった奴に死んでほしくはない。」

「でも、僕が生きているのは誰も望まない。そんな奴が居て何の得になる。

僕は：悪魔だからね。」

(早く見放せ。頼むから。： 何も感じないうちに、僕が望まないうちに！)
今まで会った奴等は僕を見かけると、

初めの内は助けてくれたり笑い合ったり楽しかった。

しかし一度正体が判ると掌を返すように

石を投げつけてきたり、殴る蹴る、斬る。

希望を見つける度壊されていく。

望みを叶えようとする度崩されていく。

だから今回もそうなる以外、何もない。

そう信じている。

「僕と居ると絶対に不幸になる。火の粉が降りかかる。

だから関わった人がそうならないように独りで死ぬんだ。」

(そうしないと、標的が僕だけなら全然良いけどキノまで。：)

「だから何だい?」

「えっ?」

セツナ s i e d o u t

セツナは自分だけ犠牲になって、
周りの人を守ろうとしているのだろう。

人間の事なんて知らないし知る気もない。

だからこそ火の粉がどんなものかも判らない。

「火の粉が何？そんな物振り払えば良いだろう。」

そんな小さなことにいつまでもとらわれていたら、
前に進めない。」

「でもっ！それでその人を傷つけたらどうするんだ！」

「それを君が癒せば良いだろう！」

思わず声が大きくなる。

しかしそんなことは気に止めずに続ける。

「僕はそんな大層な事ができる奴じゃない！」

「そんなの誰だってそう独りで出来るわけがない！

だから支え会ってやるんだ！」

「支え会える人なんて僕には誰もいない！ずっと孤独だったんだ！

だからできないんだよ！出来たらやっつけているよ……もう、

ここに來ることも無かった……」

セツナは泣き崩れ眼から大粒の涙を溢す。

それを見ていて、胸の奥が締め付けられるような感覚が私を襲った。

胸が苦しい。

(もう……こんなの見てられない！ほっとける訳がない！)

咄嗟にセツナを抱きしめる。

そして囁くように、

「もういいよ……一人じゃないだろうもう、今は。」

「誰だよ……誰なんだよ……教えてくれよ……」

「目の前にいるよ。ほら顔をあげて。」

「キノ……？でも、キノはポケモンで……」

「そんなの関係ないよ。私は心が有るし感じる事が出来る

同じだろう？」

それ以上セツナは何も言わなかった。

多分言葉が届いたのだろう心のどこかに

「さあ行こう。ここに居ても何も無いからね。」

涙を拭い微かに頷く。

離れると、不意にふわりと微笑み、

「キノ、ありがとう。」

少しだけ顔が熱かった。

しかしもう悩むことはないだろう。

道を見つけたようにしっかりと歩みを進めているのだから。

カロスでの旅はこれから始まる。

運命の回り道

最弱の旅立ち

セツナ side

僕はもう一人じゃない

それをキノが教えてくれた。

それだけで今まで溜め込んでいたことが

少し軽くなり気持ちの整理がつき、

感じるものが多くなってきた。

今まで後悔、不安や恐怖しか感じなかった

筈なのに、安らぎを感じれるようになった。

それを与えてくれたのは紛れもなくキノだ。

出会ってまだ、二日しか経っていないが

キノからは敵意も憎悪も感じない。

それどころか、僕に暖かさをくれる

冷えきった僕はその熱に頼りきっているのだと思う。

そんな中、

「セツナ、これからどうするんだい？」

「…ん… うんと、キノは？」

「私はって何が？」

「キノはどうしたいの？」

「セツナに着いていくだけ、かな…。」

「そっか… じゃあさ、一緒にどこに行きたい？」

「どこでも良いかな」

二人は世界を知らない。

キノはこの森、セツナは生まれ育った町

そこの外を知らなかったのだ。

でも、セツナは知っている

世界は広い事を、

そしてポケモントレーナーに自分もなれる事を

「それならさ… 一緒に世界を見てみようよ

僕がトレーナーになって、君は僕のパートナーとしてさ」

「パートナー……」

「うん、そうしたら何時までも一緒に居られるから」

「そうだね……私はセツナが死なないように見てないかね」

「ふふつ、そうだね……僕が死んで居なくなるといけないよ」と

そう言いながら、手を差し出す。

キノは少し首を傾げて僕の手を見つめている。

「どうしたのキノ？」

「……私、その手取って信じてもいいの？」

「僕らは同じなんだから手を取って良いんだよ」

信じるかとかはキノ次第だね」

「じゃあ、宜しくセツナ」

「うん、キノ」

手を取り合いキノが微笑む、

それを見ていると、それだけで胸の辺りが

少し熱くなった。

セツナ side out

キノ side

私は小さい時から親に

「人は私達ポケモンを道具のように使う、

だから近づくな」

そう言われて育った。

だから、セツナが手を差し出してきて躊躇った

信用がまだできておらず、そもそも

握手は対等な関係の者同士が行うことなのだから

だから手を取って良いのか、信じても良いのか

聞いた、その答えは

「僕らは同じなんだから手を取って良いんだよ

信じるかとかはキノ次第だけだね」

その言葉は私自身が望んで、求めていた答えと同じで、

人の考え方と対になる筈の答えだった。

セツナは面白い人だ

自分を省みず、自分を貫いて進んでいるのだろう。

愚直に真つ直ぐで脇目も振らず

歩みを続けるのだろう。

想像でしかないけれどそうとしか考えられない、

今までの言動を見ていれば感じる。

セツナの優しさを

だから、セツナの理想の先を見てみたい

「宜しくセツナ」

手を取り合い自然と微笑みを浮かべる。

その後、セツナが持っていたモンスターボールに入る

これでセツナもポケモントレーナーとなり、

私はそのパートナーになった。

ボールから出て、森の出口へと二人で

歩いていく、

この先何があるのかはまだ誰にも判らない

唯一つ、この日この時を境に使役する側とされる側の関係だった筈の

ポケモンと人の考え方が歪み始める

狩る者、守る者

セツナ side

ハクダンの森を抜けると、もう既に

日が高く上っており、眩しかった。

天を見上げると青空が広がり、憎らしいまでに

太陽は僕らを照らしている。

思わず手をかざし目を細める。

「セツナ？」

何時までそうしていたのだろう、

キノが此方の顔を覗き込み不思議そうな顔をしている。

気付いていないのだろうか、至近距離にキノの顔がある。

吐息がかかりそうな程近い。

「……何でもないよ? ……後、少し近いかな?」

「つー……そう、別に何でもないならいいけど……」

キノはそっぽを向いて何かボソボソ喋っている。

少しばかり驚いたが、キノは僕の事を心配してくれていたんだし…

「僕の事を心配してくれたの?…でも流石にこんな早くは

死のうとはしないよ?」

「…別に心配なんかしてないさ、ただ動かなかったから

どうしたか気になっただけで…」

「…気にくれてはいたんだ」

すると、溜め息を吐き、切り替えるように

「そんなことより、早く町に向かうよ

案内よろしくね」

キノは何故か目を合わせようとしなない。

でも気にしてもしようがない

「じゃあ、行こうか」

そう言いつつ手を引き、漸く動き出す。

何やら、ビクリと反応していたがお構い無しに進む。

早く町に向かいポケモンセンターでトレーナーカードを

作らなくてはならない。

これからの冒険に胸が高鳴りじつとしていられない
キノの手を握る手により一層力を込め走り出した。

セツナ s i d e o u t

キノ s i d e

セツナは不思議な少年だと思う。

ポケモンだと理解した今でもこんな私の手を取って
引っ張ってくれる。

離すまいと力を込めて：

こんな人間はほとんど居ない。

こんなに眩しいほど輝いて見える人は
ほんの一握りだろうか、

何故か嫌いな筈の人のそばが、

とても居心地の良い物に思える。

何時まで続くか分からないけれど、

願っても良いのなら…

何時までも続けばいい。

続かないのなら…

今この時が止まればいいのに…

しかし、これを否定する自分が心を占領している。

信用できない、消し去ってしまえばいい

そんな、感じていることと正反対の事が浮かび、

言葉が泡となって消える。

何を言いたかったのか、何を伝えたいのか、

考えた傍から心が消していく。

何を思ったか、何を願ったか

もう分からない。

だけど、どうしてか…

胸に残るこの：

温もりは消えない。

やっと街のゲートが見えてきた。
これからの道に一体、

何があるだろう。

キノ side out

セツナ side

街のポケモンセンターでトレーナーカードを作り、
晴れて僕はポケモントレーナーになった。

其所で必要最低限の道具を揃えることができた。

簡素なシヨルダーバッグを受け取り、

ポケモン図鑑を貰う。

早めに宿の予約をしておき、

残りはキノとの交流を深めていかなければならない。

早速キノとポケモンセンターの裏庭にある、

フィールドを使い、バトルを想定して動いてみる。

「そうだな…キノ、えつと…」

「そんなにモタモタしてたら勝てないじゃないか…」

そんなこと言われても、ポケモンバトル何て、

やったことないのだから分かるわけがない

仕方がないから図鑑で使える技を確認して、

一通り使ってみる。

小一時間確認や練習していたが、指示が遅く

実戦では使い物にはならない。

少し休憩して、再開しようとしたその時

誰か男がポケモンを連れてフィールドに現れ、

こちらに来る。

僕らの目の前で立ち止まると、

「失礼。先程から貴殿方の様子をそちらから見て居ましたが

その少女、ポケモンの力を使える何て珍しい道具ですね」

いきなり言葉に詰まる。

(不味いな… 嫌な予感がする…)

その男はニヤリと嫌な笑顔を作り、

視線をキノに向けて

「その道具、私に渡しなさい

さもなくば、」

少しだけ目付きが鋭くなり、

僕を睨み付ける。

「殺します」

そいつはボールをおもむろに取りだし、投げる。

出てきたのは昔、読んだ本に書いていた

ヘルガーだったか…

体を恐怖が支配する。

震えが止まらない。

無意識に後退すると、

背中にキノがもたれ掛かる。

小刻みに震えている、怯えている

覚悟を決め、深く息を吐く。

「… お前は、誰だ？」

「おっと、失敬… 私フレア団の、カグアと申します」

フレア団、そんな名前の者は知らない。

逃げたい、でも…

「フレア団何て知らないけど、こいつ… キノは渡せない…

いや、渡さない。

道具呼ばわりするような奴には、

キノは、道具じゃない… 大切な友達だ！」

「そうですか… ならば致し方ありません

死になさい。ヘルガー！」

ヘルガーが僕に向かって飛びかかって来る。

凄いですピードで噛み付こうとしている。

いや、僕の目にはもう、嘯み付いている光景が映っている。

感覚、痛みは完全に感じないまま

そのままキノを引き右に少し動く、その瞬間
嘯みついた光景は消え去り、
僕らの左側をヘルガーが通り過ぎた。

「なっ!？」

「セツナ!？」

「…見えた…」

キノ、動けるな？」

「あ…うん、動けるよ」

キノに確認を取る。

混乱しているようだが大丈夫だろう。

相手も硬直している。

今がチャンスだろう

「キノ、攻めるぞ」

「分かった！」

〈どくどく〉

キノが毒の障気を相手に浴びせる

「な、生意気な！ 焼き尽くせ！」

〈かえんほうしゃ〉

業炎を放つ、空気を裂き燃やし尽くさんとする。

しかしそれは目に見えて弱くなっている

目にはもう、キノの体は炎に飲まれて見える

冷静に解析しその光景を目に焼き付ける。

「：： 右前方に集中して防げ！」

「はっ！」

〈まもる〉

防壁を張り炎を断つ。

炎を吐き終えると、毒により苦しむ。

その隙を逃さない。

「今だ！ 畳み掛ける！」

「クツツツツツツツソがああああ！」

カグアが吼える

「キノ！ 頼むっ！ 合わせろ！」

徐々にヘルガーの体力を毒が奪う。

思考は冴え渡り視界もクリアだ。

「接近して背中に全力で叩き込めっ！」

「ハアアアアっ！」

〈あくのはどう〉

闇がうねり波動となつて、ゼロ距離で放たれる。

爆風が押し寄せる堪らず目を閉じる

風が収まり目を開くと、

地に伏すヘルガーと、静かに佇むキノ

息を吐き出し思わず握り締めていた、拳を開く。

「……何故だ……私が……こんな小僧に……」

静かに近付き拳を迷いなく鳩尾に叩き込み気絶させる。そして最後に語りかける

「偶々だ……」

まあ一つ言うのであれば……

想い、ポケモンへの想いの重さの違いだろうな、多分」

最後は自分自身に向けて語りかけていた。

思わず苦笑し下を向いてしまう

「勝った奴がそんな顔してたら、どっちが勝ったか分からないじゃないか……」

不意にキノの声が聞こえ、

顔を上げる、

其所には優しく微笑みを浮かべているキノが居た。

「はあ……フフ、まあ確かにそうだね」

それを見ていると気持ちが軽くなる。

笑みも零れる

「お疲れ様、キノ。」

それと…… ありがとう、元気出たよ」

「こつちもセツナのお蔭で無傷だよ、

それはそうと、

何であんなに的確な指示が出せたの？」

「あ…… つと、それは本当に偶々だよ」

「……ま、いいよ。」

でも凄いね…… まるで先が見えていたような感じだったし

とりあえず、今日は疲れたから休もうか」

「うん、この人はジュンサーさんに引き渡してそうしよう」

気が付くと日は沈み星が瞬いていた。

それはまるで僕らの勝利を祝っているようだった。

セツナ side out

no side

この日を境に少年は、闘いの日々へと身を落としていった。

熱き焰の原子

キノ side

昨夜のセツナを見て違和感を感じた。

でもその違和感は煙のように薄れて消えていった

出会ってまだ少ししか経っていないが、

信用するに値する人間だと思う。

だからセツナという人間を見るようになったのかもしれない

僅か十数年しか生きていないであろうセツナを。

今朝は日が登り始めた頃に目が覚めた。

セツナが今日はジム戦をしに行くと言っていたから

少し体を動かしていた方がいいだろう

そう判断してベットから抜け出す。

セツナからは昨夜のこともあつてか、なるべく力を使うな、と言われていているから少し走るくらいに留めておく。

部屋を出る前に身だしなみを整える。

ポケモンでもメスではあるから気にはなる

姿見の前に立つと鏡に映るのは人の姿の自分
「…こんな姿になったのかな…」

つい、眩きを漏らしてしまう。

自分は普通ではなく異常で忌み嫌われた。

でも、そんな自分に

手を差し伸べてくれた恩人の力になりたい。

セツナは儂く脆く美しいと思う

だから支えたい、いつまでも、どこでも
決意を胸に一步踏み出す。

キノ side out

セツナ side

朝、目が覚めると朝陽はもう昇っており明るかった。
体をほぐし起き上がろうとして気づく。

キノが居ない

それに気付いた途端に不安が押し寄せる。

(つー…：はあ、なんかもうキノに頼りきってるのかな…：)

キノが心の支えの大部分を担っていることを自覚する。

一緒にいると少しだけ勇気が出てくる。

安心する

でも、それは自分だけなのではないか？

キノはよく思っていないんじゃないか。

そんな思考は頭を振って追い出す。

答えがどうであれ、

今日のジム戦に備えて気持ちを作っていかなければならない
身支度を整え終わったと同時に部屋のドアが開けられる。

「セツナ！」

「うわっ！お帰り、キノ

どこいったの？」

何やら焦っていて息が上がっている。

落ち着かせて話を聞く。

「トレーニングをしに森の近くまで走っていったんだ、

そこに昨日戦ったカグアって人と似た服を着た集団が森に入っていくのを見て

急いで戻ってきたんだ」

「姿は見られたの？」

首を横に振る。

それを見て安心する。

姿を見られたら今は耳と尻尾は消しているけど

捕まってしまうかもしれない

それはともかく、嫌な予感が脳裏をよぎる。

フレア団とか言う組織が昨夜のカグアの行いから察するに

いい組織とは言えないだろう。

警戒しつつ旅をしていく必要がある。

そこまで考え、

「一先ずはジムに挑戦しに行かないと」

「そうだね、取り敢えず目先の事に集中しようか」

一旦話を切り上げ宿を出る。

一応の為、キノにはボールに戻ってもらいジムに向かう。

町の広場に差し掛かり

ジムが見えてきて走り出したその時

森の方から、

ドオオオオオオオオオオオオオ

爆音、爆熱風が押し寄せる。

広場にいた人々は

数瞬の内にパニックに陥り逃げ惑う。

爆風をやり過ごしどうにか立ち上がる。

人が居ないことを確認しつつ即座に

キノをボールから出し駆け出す。

「奴等だ！行くぞ！」

「やっぱり何かやる気だったんだ…。」

キノが示す道を進み最短距離で走り抜ける。

僅か町の中心から十五分程度で着くことが出来た。

躊躇いもなく森に二人で踏み込む。

進むにつれて木が燃える臭いが強くなる

慎重になりながら少しずつ進み

現場に急ぐ

その時、

「おい、ブツは手に入った引き上げるぞ」

「こいつはどうする?」

「捨てておけそんなクズ」

そんな会話が聞こえる。

咄嗟に近くの木に身を隠し様子を窺う

何やら二人の男の声と数人のざわめきが聞こえる

数人の男達で大きな袋を持ち上げ、

それに指示を飛ばし男二人が何かを見下ろす姿が見える。

やがてそいつらが居なくなると出ていき

森の燦々たる様子を目に入れる

不意にキノが

「酷い……こんなの何で……」

「……………」

無言で顔を背ける。

キノは茫然として森だった場所を見つめ続ける。

「ヤ……ヤ……コ」

微かに声が聞こえる。

弾かれたように声の方へ走る。

そこには、弱り切った小さなヤヤコマが倒れていた。

「キノ……急いで戻る……この子が死にそうだ！」

直ぐ様ヤヤコマを手持ちのボールで捕まえ町に駆け戻る。

何回か転びそうになったがキノに助け起こされ

ポケモンセンターに駆け込む。

後から聞いた話だがあと少し遅れていたら

助からなかったらしい。

最新の医療機器を使い完全に治ったらしい。

時計を見ると漸く正午を過ぎたようで

まだ日暮れには時間がある。

戻ってきたボールからヤヤコマを出す。

すると、人を警戒しているのか直ぐに飛んで距離をとる。

「ヤヤコマ、人が憎いか？」

小さく頷く

「君だけで復讐できるか？」

少しの沈黙の後地面に降り立ち

俯きながら頭を横に振る。

「僕は君の力になりたい…… かな」

「セツナ、何いって……」

キノの言葉を手で遮る。

ヤヤコマは恐る恐る顔をあげる。

「だから、力を僕に預けてくれないかな？」

答えない。

「今すぐ答えなくて良いよ」

ボールを掴みジムへ向かう。

セツナ s i d e o u t

no
side
セツナの影を小さな影が少し遅れて追いかけて出す。

炎熱と宵闇

セツナ side

僕は意を決してジムの扉を開く。

扉を潜りそこには一枚の大きな写真が飾ってある。

ポケモンセンターで聞いた話によると、

このジムのジムリーダー、ビオラは

有名な写真家であるらしい。

その写真にわずかな時間ながら心を奪われた。

それには、大空を舞うポケモンの群れが写っていた。

「すごい…綺麗…」

思わず声が漏れる。

「そうだね…」

キノも同じことを思っていたらしい

そこに、

「その写真、気に入ってくれたかな？」

少しびくりとなりつつ声のした方に

振り返るとパチリとシャツターを切る音が鳴った。

そこにはカメラを構えた女性が微笑みながら立っていた。

「ビツクリさせちゃったかな？」

「ゴメンね、つい君たちが見えて絵になるなつて思つて撮っちゃった」
カメラを下ろし謝ってきた。

「いや、大丈夫ですよ」

「僕らはここに入ってきたときにこの写真に見とれてしまつて」

「へえ、この写真のよさに引き寄せられたか」

他に人たちは見慣れてるからつてあまり気にしてないみたいだけど

ポケモンたちの力強さをよく写せたと思うんだ」

話している様子から本当に写真が好きなんだなと思う。

すごく表情が明るい。

「あ、そうだ！自己紹介がまだだったね」

私はビオラ、写真家をやっているよ」

一瞬硬直する。

この人は今なんて?… ビオラ?
ビオラって…

「あの、もしかしてジムリーダーのビオラさんですか?」

「お、よく知ってるねそうだよ」

私は写真家兼ハクダンジム、ジムリーダーのビオラだよ

それじゃあ君たちは挑戦者つてことかな?」

そういつた瞬間に空気が変わる。

オーラと言うか気配が変わる。

笑顔は変わらないのに全てが変わる。

(これが… ジムリーダーか、強いな)

「そ、そうです。」

僕はセツナ… このジムに挑戦しに来ました」

「うん分かったよ、じゃあついてきて」

そこで初めて左腕が小刻みに震えていることに気がついた。

恐怖だろうか、心臓が早く鼓動を刻み

やや、呼吸が浅くなる、気分が悪い。

「セツナ、大丈夫?」

「多分・・・でも少し怖いかな

まあ、いいか・・・行こうキノ」

(これくらいで怖じ気づいてたらこの先進めないな・・・)

ビオラはもうすでに大きな扉の前に立っていた。

自信に満ちた笑みを浮かべ、

「ここが、バトルフィールドだよ

じゃあ、早速始めようか！」

「はい、ビオラさん手加減は不要ですよ」

見栄を張り少しだけ挑発する。

緊張で足がわずかに震える

「良い返事だ。

じゃあ、彼女さんは観客席に・・・」

どうやら勘違いをしているらしい、

にっと笑い

「キノは僕の相棒ですよ、

キノ無しのバトルはあり得ない」

「どぶつこういよっ」

キノが一步前に出てはつきりと告げる。

「私はキノ、ポケモンだからね」

その姿を見て思わず、綺麗だと思ってしまった。

強くしなやかで輝く月のように

ビオラは呆気にとられ、呆けている

意外とこの反応は面白い。

「ま、そう言うことで始めましょうか

ビオラさん！」

「色々と気になるけどそうだね

バトルが終わったら聞かせてもらうことにするよ

ルールは手持ちすべてを使ったフルバトル

そっちは何体いるの？」

「：：：二体です」

「そう、分かったよ」

即座に切り替えたのか不敵な笑みを浮かべ

高らかに宣言する。

―バトル開始!―

「行け!アメタマ!」

「アメツ!」

ビオラはアメタマを繰り出し様子を伺っているのか
指示を出さない。

「ねえねえ、セツナ君

キノちゃんって何のポケモン?」

わざとおどけたように

「いやいや、さすがに教えられませんよ

弱点を自分から曝すなんてしませんから」

「そうだよね… 普通は

まあ、まずはこつちからいくよ!

アメタマ!」

〈バブルこうせん〉

「アメツ」

アメタマは滑らかに横にスライドすると、

キノを中心に円を書くように回り泡を出す。

「キノ、目眩ましさせて」

キノは両手を前につき出して

「簡単に言わないでよね！」

手に収束させた光の弾を解放し、

視界が純白に覆われる。

「何これ!？」

ビオラの驚く声が聞こえる。

これはキノの性質を応用したものであり、

他のブラツキーは分からないが、

キノと言うブラツキーは体内に月のエネルギーを蓄えている。

キノを理解しようと話をしているときに教えてもらった。

まあ、他のことにも使えるらしいが今はこれで良い。

視界が潰され見えないがうまくやっていることだろう、

「相手を捕捉して！」

「もうやった！」

「オツケー、じゃあ…。」

自分の声に被せるように響く声とする。

「どくどく」「むしのさざめき」

視界が戻り始め自分も相手を捕捉しようとして

目を開けると、毒の障気を放つ寸前のキノを

衝撃の波が意とも容易く飲み込む。

「くああ！」

「キノっ！」

キノが吹き飛ばされ背後の壁に叩き付けられる。

聞こえた技の名は「むしのさざめき」

悪タイプのキノにはかなりのダメージだろう

「これぐらいで出し抜けるなんてなめてもらっちゃ困るなあ」

「やっぱり付け焼き刃程度の策じゃなあ…」

キノ！大丈夫だよね！

背後を振り返ると砂煙の中から服装を少し乱した程度で

平然と出てきた。

「当たり前前に決まってるでしょ…」

「防御したからって言ってもかなり痛いけどね」

「堅いなあ

でも、それ位で倒れられても困るんだけどね
幾らこの子が育てられてるからって」

ため息を吐きつつ次に備えるビオラ、
実に隙がなく攻めずらい。

だんだん身体の奥底から何か熱いものが
込み上げてくる感覚がする。

それにはあまり意識せず目の前の戦況を
即座に確認し思考を巡らせる。

(やっぱりキノだけだと手詰まりになるな…)

でも、ヤヤコマに二体は荷が重い、

だからキノだけでアメタマは突破したいところだ)

「キノ傷は？」

近付いてきたキノに小声で囁く

「もう大分治癒した大丈夫よ」

確かに外傷は見当たらない。

「アメタマはもうキノに任せる

方向は教えたりとか補助はするから、
僕の判断能力だと追いつかない、

だからな、攻め時になつたら思いつきりぶちかませ」

左の眼球に燃えるような熱さを感じ
感覚がより鮮明になる。

その全てが左目に集束する。

「反撃開始だ……覚悟は良いか！」

世界は一気に様を変えた。

セツナ s i d e o u t

小さき身体、大きな勇氣

キノ side

「良いと思ったときに思いつきりぶちかませ」

セツナがそう言った瞬間、

空気が、気配が変わる。

少しだけ、寒くなった気がする

温厚だった気配が獰猛なそれに変わる。

そして、眼が鋭く光を放つ。

これは昨晚、フレア団のカグアと言う男と

戦った時のあれには及ばないものの、

纏う雰囲気は同じだった。

つい、戦いの途中なのに相手から目を離してしまふ。

しかし、幸運にも相手もなにかを感じ取ったらしく

攻撃をしては来なかった。

「セツナ君、今度はどんなことで私を驚かせてくれるのかな？」

おっと、睨まないでくれないか？

怖いだらうその顔はさ」

ピオラが挑発をする様に笑いながら言う。

それには、一切の反応を示さず

ただ一点を凝視している。

それは、獲物を仕留める獣のような眼だ。

(怖いって感じるけど、それより…)

私には哀しそうに見える…)

そう、セツナのこの本気のバトルの姿は

あまりにも儚く哀しそうなのだ。

まだ、二回しか見ていないが

それが判るくらいセツナを短い時間で

たくさん見ていたのだろうか…)

でも今はそんなことを気にしている場合ではない。

意識をバトルへ戻し大きく息をはいた。

「頼まれたのならしつかりと責務は

果たしてこないかね…」

あの子にもちやんと繋げてあげないと…」

思考を巡らし、バトル全体を客観的に見る。

アメタマはほとんどダメージを受けておらず余裕そうだ。

対して自分は治癒したものの疲労が少し残っている。

状況を整理し、手順を組み立てる

「よし、行こう！」

ゆっくりと一歩踏み出し

目を閉じ、意識を集中させた。

(セツナ、見ててね私の本気を)

再び戦いが幕を上げる。

キノ side out

セツナ side out

キノが相手に向かって歩みを進める。

何を始めるのだろうか

しかし、意識を切り替えたのだろうか

迷いが感じられない。

ピオラのアメタマはキノを警戒してか、

少しずつ後退している。

「アメタマ、「バブルこうせん」！」

さっきの「あわ」と比べて威力も増している。

「あわ」の上位互換の技なのだろう。

「キノ、二秒後に左斜め前方」

技の発動前だが、軌道が見える。

身体が少し熱くなる。

右目に痺れが出てくる。

視界が少し欠ける。

キノは指示を聞いてその方向に飛び出す。

その直後、「バブルこうせん」が

キノの走っていた空間を過ぎる。

ピオラは技のタイミングを完全に見破られたのが

衝撃だったのか少しばかり指示が止まる。

そんな隙をみすみす逃してしまふキノではなく

キノが一瞬で距離を詰めて蹴りを放つ。

キノの身のこなしは荒削りな所があるが、

しなやかで尚且つ綺麗だ。

キノはあまり、遠距離戦が得意ではなく

精密な技の発射が出来ず、

至近距離じゃないと命中率がかなり低い。

しかし、それを補える程の格闘術の基礎が

身に付いていた。

キノは生まれたときから異常な存在で、

肉親には見放され自分で自分を守るしか選択肢はなかった。

だから森のポケモン達の動きを

見よう見まねでなんとか覚えたらしい。

普通ポケモンが肉弾戦を仕掛ける事は余り無く

その分対応も遅れるのだろう、

ビオラの表情に漸く焦りが見え始める。

俺はおもむろに口を開き、

「キノ、もうやったよな？」

ニヤリと笑う。

「はあ… もうとつくの昔に終わってるよ」

キノもそれに溜め息を吐きながら答える。

すると、アメタマが揺らめく。

「なっ?! アメタマ!?! どうしたの!?!」

苦しそうで顔を歪めている。

そう、毒だ。

実は初めの・フラッシュ・バン・の時の攻防の際に、

相手に当てるはずの<どくどく>を

<むしのさざめき>の衝撃波により、自身に降り注いってしまったため

「もうどく」に侵されてしまった。

それが鍵となる。

キノ、もといブラッキー種は特性が〈シンクロ〉であり

〈シンクロ〉は相手に自分の状態異常をその名の通りシンクロし

相手に「もうどく」を付与したのだ。

アメタマはもう弱りきっており強攻撃を叩き込めば

一発で落とせる。

「キノ、まだ行くぞ?」

キノもかなり辛そうだ。

〈シンクロ〉は相手にも付与するだけで、

自分の状態異常は治らない。

「まだまだ… 余裕だよ…」

「じゃあ、ぶちかませ」「白夜の解き放たれた慈雨（ルナ・インパクト）!」

キノの右手にエネルギーが収束し光を放つ。

それは正に暗闇を照らす月光の如き輝き

それを立ち上がろうとしているアメタマ含め、周囲に

「解放（バースト）」する。

視界を白く染めるさっきの・フラツシユ・バン・

とは比べ物にならない位の圧倒的光量

アメタマを容易く飲み込みフィールドを削り取る。

光が収まるとフィールドには、

目を回して倒れるアメタマと、くらりと崩れ落ちたキノの姿が

キノが倒れると同時に左目が焼けるように熱くなる。

視界がボヤけ頭が冷えていき疲労感が体を駆け巡る。

「戻って来て…キノ」

ボールを掲げキノを戻す。

「お疲れ、有り難うね」

ボールが微かにカタリと揺れた。

「あくアメタマがやられちゃったかく

つくづく君は面白いよ！

さて、次いつてみようか？」

「そうですね…じゃあ少しだけ待っててください

友達を連れてくるので、アイツを必ず」

苦笑し踵を返して、入り口から走り去る。

ジムから出て広場に立ち

「ヤヤコマ、決まったかい？」

返事はない、姿も見えない

ボールも消えている。

「はは、は、まあ、僕みたいなちんちくりんの下では戦いたくないのかもね……」

ボールを拾い上げ、ジムに戻る

降参するため。

居ないのはヤヤコマの意思だからしょうがないのだが、

少し残念かなあ……

扉を潜り、

「ジオラさん、すみま……」

そこまで言いかける。

バトルフィールドに凜として立つ小さな影、

ヤヤコマだった。

「何だ、居んじゃん……」

ヤヤコマは小さな羽を広げ差し出した

僕の指に止まる。

「本当に良いの？」

素っ気なく飛んで臨戦態勢に入るヤヤコマ、

そこで

「その子、君が居なくなつた途端そのの茂みから
出てきてたんだよね、ま、早速再開しようか

ビビヨン」

そうビオラは宣言しボールを投げる。

華麗に燐粉を散らすビビヨン

それに対峙するは、

仄かな、でも確かな熱を内包する小さな不死鳥、ヤヤコマ
戦いは佳境に入る。

セツナ s i d e o u t

闘いの証 強さの証明

セツナ side

「行こうか、ヤヤコマ」

疲労を感じるが無理矢理に笑いかけるが

ヤヤコマから返事は無い。

しかし、その小さな背中から伝わる想いは

熱く強かった。

気合いはキノの試合を見ていたから十分だろう

そう判断し相手に向かい直る。

(ビビヨンか：：少しヤヤコマにはキツくて過酷だとは思うけど

この位の事を感じてもらわないと：：かな?)

こんなところで立ち止まっていたらやりたいこと、

成すべき事が叶わなくなっちゃうから：：

「セツナ君、気合いは十分みたいだね：：

それじゃあ今度はこっちから行かせて貰うよ！」

その言葉を皮切りに指示もなしにビビヨンが突撃してくる。

一瞬反応に遅れるがヤヤコマも飛び出す。

ビビヨンは優雅に飛び回り自分の間合いを測っているのだろうか

それに対しヤヤコマは縦横無尽に翔け回り、ビビヨンに追従しようとしていた。

僕はそのスピードに驚愕していた。

ビビヨンが速いことはもう予想がついていた、

しかしヤヤコマはまだ体も小さい子供だと思っていたが速さは目を見張るものがある。

「へえ… ヤヤコマ、ここまでできるのか… つ！」

ヤヤコマ！戻ってきて！」

ヤヤコマにばかり目を向けていたらビビヨンも黙っていない。

ヤヤコマの進路上に光に当たり煌めく粉のようなものが見えた

恐らくりんぷんだと思う。

ヤヤコマはビビヨンを追い掛けるのに必死なのか指示を聞かずそこへ突っ込む。

すると、ヤヤコマを中心に粉塵爆発が起こる。

『ヤコッ！』

「ヤヤコマー！」

小さな体が大きく吹き飛ばされ、目の前に墜ちてくる。

しかし、直ぐに起き上がりこちらにまるで、

「まだまだやれる！」とばかりに羽を広げた。

それを見て僕は自分の弱さを感じた。

「スゴいじゃん… ヤヤコマ…」

そんなヤヤコマに負けてられないよ僕だつてさ…

ヤヤコマ！僕も張り切っていくよ！」

拳を握り叫ぶ。

「ヤヤコマー！「でんこうせっか」だー！」

一瞬のタメをつくり矢の如く飛び出す。

するとビオラも

「ビビヨン！「ぎんいろのかぜ」」

ヤヤコマを阻もうと白銀の風の結界を起こす。

僅かな戦いを見て僕はヤヤコマの戦闘スタイルを把握する。

恐らく、ヤヤコマは小柄でパワーが無いためスピードで

パワーの上乗せをしているのだろう。

キノは体術等で捌きつつ隙を見てカウンターを入れる
攻守でどちらかと言えば守りになるだろう。

キノとは全く百八十度違う戦い方で指示の出し方も変わってくる。

その上、僕には才能がなく指示もマトモに出せないため
ポケモン自身に任せて頼っている。

キノは一人でいる期間もありその判断等出来ていたが

ヤヤコマはどうだろうか、まだ幼く多分一人で戦った事も無いだろう。

そんな考えもあり思考は混乱を極めていく。

(ヤヤコマへの指示が判らない… まずい… 早くしないと!…)

でも… ヤヤコマが…

張り切って行くって言ったけど… こんなんじやダメだ!

どんだん思考は泥沼に嵌まってバトルにも集中出来ない。

(まずい、まずい まずい まずい!)

目の前も見えなくなったその時、

右肩に微かな重みと

腰のモンスターボールがカタリと微かな揺れを同時に感じた。

セツナ side out

ピオラ side

バトルは始まったばかりの時はヤヤコマのスピードに驚きはしたもののそういう相手のための対策は有るため、しっかりと見極め落ち着いて対処できた。

その後は酷いものだった。

ろくに指示ができずバランスが崩れ始め

攻撃は当たらずヤヤコマは疲労し動きが鈍っていった。

それを見て私は、

(ああ…この子はダメかなあ…期待してたんだけどね…)

まあ、仕方ないか)

ジムリーダーは人を見極めバツジを渡すに値するかを品定めする

その為観察眼は少し優れているのだ。

私はセツナ君には期待していた、セツナ君から感じるものがあつたからだ。

まるで英雄譚を夢見る夢見人のような熱を感じたのだ。

しかし、そんなもの今では見る影もない
無くしてしまつた人にはもう資格はない

ぼろぼろになつたヤヤコマを仕方なしに容赦なく潰しにかかる。

「ビビヨン、終わりにしよう。」「ソーラービーム」

ビビヨンは目を浴びて力を溜めていく

せめて最後まで見守つてあげようとヤヤコマに目を向ける。

その時、ヤヤコマはビオラを見下ろしたかと思うと

振り返りセツナ君に向かつて飛んでいった。

主人であるセツナ君を守ろうというのだろうか

でもそんな事はもう良い、もうすぐ準備が終わる。

そう考え再びセツナ君に視線を向けると

セツナ君の瞳から煌めきながら振り払われた物が見えた。

その直後、圧倒的な光の奔流が放射された。

ビオラ s i d e o u t

セツナ s i d e

閉じた臉の裏に僕よりも大きい二人の少女が見えた。

片方は黒のキャスケットを目深に被り、肩甲骨の辺りまで伸ばした黒髪を一つに結い黒のブラウスとレギンスの上にハイウエストスカートを合わせた黒中心の落ち着いた雰囲気の少女は

僕の相棒と言うべき存在のへキノ

もう一方は、僕は知らない。

赤髪のショートカットでオレンジのチュニツクと黄色のキユロツトを着た

元氣そうな印象を持つ少女

その二人は笑顔だった。

その笑顔は僕に「独りじゃないよ、頑張つて！」
と言っている気がした。

僕はそれを幻視し胸が熱くなった

頬に流れるものを感じるそれを拭つて目を開ける

「ヤヤコマ… いや、今からキミはイアだよ…」

イア、三人分の力ならあれに負けないと思う。

だから…」

手に乗ったヤヤコマを両手で包む
それから相手を見る。

「じゃあ、僕達らしく真正面からぶつかってやろう、イア！」

イアは、勢いよく飛び出しビームにぶつかる。

ほんの僅かに拮抗したが、イアが押し返していく

小さなからだでも大きな力を持っているのだろう

ビビヨンまで、ほんの数メートルと言うところでビームの限界だったのか

激しい爆発が起こる。

二つの影が一緒に落ちてくる。

「良かった、お疲れ様イア」

駆け寄りボールに戻す。

すると、

「引き分けかあ… 残念だけど楽しかったよ！」

ビオラさんがスッキリした顔で向かってきた。

僕はニヤリと笑い、

「エへへ… 実は引き分けなんかじゃないですよビオラさん」

そう言うとうとボールからキノが嬉しそうな顔して出てきた

ビオラさんの笑顔が固まる。あ、なんかこれ面白い……
「まだ、キノの体力残ってるんです

って事でぼくのかち……で良いですか？」

「……つくづく君には少しばかり驚かされてばかりだよ

倒れたのも演技だったなんて……

まあ良いか！じゃあハイこれ、ジムバッジ」

「ありがとうございます！ビオラさん！」

よかった……どうにか取れて……」

「ホント、私があればやって負けてたら台無しじゃないか」

「アハハ、違うないね」

なんて漸く笑えた。

大変だったけど楽しかったと思う。

「じゃあ、かねてからの約束、色々聞かせてもらおうよ♪」

しかし、そんな楽しみも長くは続かなかった。

疲れたのに……何て言葉は呑み込んだ

騙しておいてさすがにならなくて思ってたんだもん。

しょうがないか〜

こうして僕の初めてのジム戦は幕を閉じた。
このあと疲れ果てるまで質問攻めにされたのは言うまでもないよね……

月下の誓約

セツナ side

ようやくビオラの質問攻めから解放され宿に戻ってきた。

今は、回復のためにポケモンセンターに

キノたちを預けているから独りで部屋に戻って来た。

ふと疲れを感じてベッドに倒れこむ

眼を閉じるとビオラとのジムバトルが思い返される

やはり感じるのはトレーナーとしての実力不足だ。

落ち着いて振り返るともつといい指示が出来たのではないか、

もつとキノやイアの力を生かされたのではないかと

しかし、今回のジム戦では見極めて指示をすどころか

ポケモンたちそれぞれに任せてその補助をする程度のことぐらいしかできなかつ

た。

「流石にこのままじゃいけないよなあ……」

しかしながら解決策など見つかるはずもない

人に聞こうにも自分に合ったスタイルで戦わなくてはいけないため

助言ぐらいならもらえるかもしれないが

僅かながらもその人の型にはまってしまい自分の目指す道を選択する時に過ちを犯してしまいそうになるとそんな予感がするのだ

だからこそ自分の個性を生かせる戦い方を身につけなければならないのだろう
しかし今の自分になんか個性なんでもものはないだろう。

しいて言えば型のない自由（フォームレス）な見方ができることだろうか？

しかしまだトレーナーとして日の浅い僕にとっては障害でしかない、
情報量が多すぎてどこに目を向ければいいのか見当もつかず

指示が混乱しキノ達に負担を強いることになるだけだ。

やはりマイナスな考えしか浮かばない。

「… そういえば」

ふとその時、ジムを出てくるときにピオラに言われたことを思い出す。

『セツナ君、君はあまり気にしていないようだけどね… あんまり自分を責めすぎると

周りが見えなくなるんだ……だから、信頼できる人を見つけて幾らかの重みを共有すればいいんだよ

そうだなあ……例えばまだ早いかもしれないけれども生涯のパートナー……とかね』
まだ意味は分からないが一人で抱え込むなって感じのことだろうか？

何やらビオラは含みを持ったような笑みで僕とキノを見つめていたのは
本当にどういう意味か理解ができなかったけど。

「信用……か、困ったなあ……そもそも僕、知り合い自体いないんだけどな」

ふと時計を見るとそろそろキノ達の回復が終わるころだろう

さすがにキノをヒト型のまま回復に出すわけにいかないということを話したら

「一応、ポケモンの姿に擬態は出来るけど……と言うか変身？みたいなにできるけど
そっちに方が都合がいいのならそうするけどどうする……？」

ということらしかった。

それでもと一抹の不安を抱きつつ部屋を後にする

廊下を歩いていると幾人かのトレーナー達とすれ違う

談笑しているもの、手をつないで歩くもの、

どれも僕には無縁の物だろう……だって僕は孤独だから。

それらを見ているのが何となく苦しくなって足早に廊下を進む

なぜか周りがみんな僕を笑っているような感覚に陥る

(.: : いやだ.: : こんな.: : なんか怖い気がする.: :)

もうほとんど走っているような状態で角を曲がる

ドスっ!と出合い頭に誰かとぶつかる。

「きやつ.: : ってセツナ?どうしたの?」

ハツとなつて顔を上げるとキノがイアを肩に乗せて僕を受け止める。

「そんなに走っていたら危ないだろう?どうしたん.: : うわあ!えっ!?!ちよつ、セツナ
どうしたの?本当いきなり」

キノの言葉を遮つてキノの腕を引き来た道を戻る。

キノが混乱しているように焦って言葉を出すがそれに答ええない

その勢いのまま部屋に飛び込んだ。

セツナ s i d e o u t

温もりが消えないように

キノ side

私はポケモンの姿に擬態してセツナが仲間に加えたエアと共に治療を受け終わると、一人にしていたセツナのもとに戻ろうと二匹で待合室まで戻ると物陰に隠れてヒトガタに戻る。

エアは少し驚いたようだったが説明してあげると納得したのか肩に乗ってきたのでそのままセツナが取った部屋に向かう。

この見た目ならトレーナーとパートナーポケモンに見えるだろうそう判断し、ビクビクしながらだとかえって目立つから自然に

「じゃあ、行くうかセツナのところ」

あの子は暖かいからなんだか安心できるんだよ。

君もそう思わないかい？」

エアは少し考えるように、首をかしげると

やがて「ヤコッ！」と鳴いた。

それを聞いて少し顔が緩む。

「なんだか自分が褒められたかのような気分になって少しばかりむず痒い気がする。だろろう？それにセツナは僕を見ても優しくしてくれる

そんな彼の少しでも力になれるように頑張ろうね」

そう言いながら廊下を進む

段々と人が多くなつてきて少し煩わしいと思いつつも

無視して進む。

すると曲がり角の向こうから少し柔らかいような優しい匂いが

近づいてくるのに気づいて、（迎えに来たセツナかな？）

と思いつのまま曲がり角を曲がろうとした。

するとその匂いのもととぶつかってしまった。

「うわっ！と。セツナ？危ないじゃないか

気を付けてくれないと怪我するよ？

……って、セツナ？」

彼は私と認識するや否や手を引いて歩いてきた道に戻る

セツナの表情は窺えず何を考えているのかわからない。

しかし私は、今だ手を握つてもらうのに慣れていなくて

少しばかり顔が熱くなる。

「セツナ?… その、どうしたの?」

それには返答が返つてこず、そのまま付いていく

少し早足でそのまま部屋に到着したのかドアを開け部屋に入つて

突然、セツナが立ち止まり手を離すと、

少し戸惑うように視線を下に向け彷徨わせ

「あ…… あのさ、キノ。僕は…… あの…… さつきまで

だった」

「え?聞こえないんだけれど、さつきまで何?」

「だから…… さつきまで…… さ、居なかつたから……」

何か…… えっと、なんか嫌だった……」

「いや?つて何が?」

「…… 一人だったから、何か居なくて…… 嫌だった……」

それを聞いて何を言わんとしていいのかようやくやく分かつた。

(何だ、私と一緒にだったんだ……)

ただただ私のマスターであるこの子は寂しいだけなのだ。

でも、甘え方がわからないんだ。

私が今まで独りぼっちだったようにきつと彼もそうだったのだ。

私が今よりもっと幼かった時に思った

してほしいと願っていたことを、いまセツナが望んでいるのだ
ならばセツナが伸ばしたその手を私が取ろう

不安を取り除いてあげよう。

「…セツナ、私も嫌だった」

「…？」

「多分イアも、だからさ…」

私はセツナに歩み寄る

セツナは不思議そうな顔で反射なのか後ろに下がる。

しかしすぐ後ろにはベッドがありすぐにセツナの後退は止まり

あとは何もしなかった。

それでいい、抵抗されても拒否されてもやることは変わらない

そつと手を伸ばして

抱きしめる。

セツナの体からは一瞬で力が抜けベッドに倒れこむ
少し力を込めてギュツと抱きしめる。

「たくさん甘えさせてよ、セツナ」

顔を寄せ耳元で囁く。

返事はないがセツナの細い腕が私の服を強く握っている

これは良いってことだろう。

頭を抱き寄せ胸元に抱き込む

胸が暖かい、心地いい

私が知らなかった気持ち、知りたかった温度

それが体中を包んでいた。

キノ side out

支え合うこと

セツナ side

あたたかい。

最初に感じたのはそんなこと

あたたかくて優しい包み込んでくれるような
心が安らぐそんな気持ち。

キノは『甘えさせて』と言っていただけ

甘えさせてもらっているのは僕の方だろう

初めて感じる心の温かさは

心地よくて嫌じゃない。

「……………僕、こうしてもらったの初めてだと思う……………」

悪くない……………むしろ気持ちいい……………」

ありがとう、キノ、イア」

そつと手を伸ばしキノの服を掴む。

僕からはできないけれどせめてこれくらい

—— 離したくないってわがままくらいしても罰は当たらないだろう。

「…… もういいや、キノ、イア、ありがとう」

「私から求めたのだからお礼を言うのはこっちの方だよ」

キノはそう言ってあくまで自分が言った我儘だということを譲らない。

与えてもらったものが多いのは僕の方なのに……

まだ出会ってからそんな長い時間が経ったわけではないけれど、

キノの優しさというものが感じられる機会が多かった。

少なからず助けてもらっていることがあったはず、

頼りきりなのに嫌な顔一つもせずに笑いかけてくれる

太陽のように輝きを放っているわけでもない、

夜空に浮かぶ月のようにやさしい笑みを浮かべて。

「僕さ、これからもっとトレーナーらしくあれるように頑張るよ

だからさ、キノもイアも僕の友達……いや、仲間としてよろしくね」
だから僕は、ただ上を見上げ続ける夢見人であり続けたいと思う。

「セツナ、これからどうするつもりなの？」

「ん、どうって？」

「これからも一応ジム戦は続けていくんでしょう？」

だから、これからの方針的なものはどうするのかって話だよ」

確かに、これからジム戦を続けるにしろ

何をするにしろ方針を固めていかなければならない。

僕自身はできればジム戦を続けていって自分を見つけたいというのが

本心ではある。

「……キノはさ、もし僕がジム戦をやめるって言ったらどうする？」

「……そうだなあ、その時は従うかもしれない……かな

それがセツナの意味ならば従うつもりではあるよ」

「…そう…なんだ…」

「でもそんな気はないでしょ？」

「だって、世界と一緒に見て回ろうって約束したんだから」

「……………ふふ、そうだね」

「イアもそれでいいかな？あいつらへの仕返しはもつと力をつけて

同じようなことを繰り返そうとしていたらそれを止めに行けばいいさ」

「イアも羽を広げて肯定の意を示したように思える。」

「その証拠にキノが微笑みつつ首肯している」

「それじゃあこれからの方針についてだけど」

セツナ Side out